

「読んで書く」ことの練習問題：原文＋ポイント部分

専門家と渡り合うには

私はいろいろな分野の本を出したり、専門家と対談したり。そこで、こんな質問をされたことがありました。

「専門家と渡り合えるところまで来たな、と自分で思えるのは、どういうときか」

思わぬ質問です。「いい質問」ですね。私が「いい質問」だと思うのは、予想外の質問によって、自分の中で新たな着想や見解、自己分析が生まれるときです。

これまで考えたことはなかったのですが、この質問をきっかけに考えることになりました。そこで気づいたこと。それは、専門用語を使って説明する専門家の言葉を、瞬時に小学生に分かる言葉に“翻訳”して説明できることです。

あるいは、専門家にとって想定外の質問をしたことで、専門家がこれまで発言したことのない内容を引き出すことに成功したときです。私の質問を境に、相手の反応が生き生きとしてきたり、話の展開に弾みがついたりすると、「ちょっとは渡り合えたかな」と思います。

もちろん専門家は、海上に出た氷山のほんの一部でしか反応していないかもしれませんが、質問次第ではもう少し深いところで答えてくれる可能性があります。それができたときは、正直「やった！」と思います。

その人の話す意味を翻訳できる、いい質問ができる、という経験が増えるほどに、自信がついてきます。それは越境の自信です。(539字)

(池上彰『知の越境法』／光文社新書；2018.)

「読んで書く」ことの練習問題：要約例

専門家と渡り合うには

筆者が「専門家と渡り合えた」と思うのは、専門用語を使った説明を、瞬時に小学生にわかる言葉に「翻訳」できたときだ。また、筆者が想定外の質問をしたことで、新しい発言内容を引き出せたり、反応が生き生きとして話の展開に弾みがついたりしたときだ。質問次第では、専門家はさらに深いところで答えてくれる可能性がある。その人の話す言葉を翻訳できる、いい質問ができる、という経験が増えるほどに、越境の自信がついてくる。(200字)